

## 2022.8.28 主日礼拝

### 聖霊降臨節第13主日礼拝（家庭礼拝の式順）

黙 祷

聖 書 マルコによる福音書2章1-12節

説 教 「起き上がって行く」 牧師 三浦 啓

讃美歌 458「信仰こそ旅路を」

献 金

黙 祷

今日の聖書箇所は、「中風の人をいやす」という有名な箇所ですが、この、中風という病気はどのような病気なのでしょう。国語辞典によれば、日本語の「中風」は、脳血管の疾患のため、麻痺や言語障がいをもたらした状態を言うのだそうです。鍼灸（しんきゅう）などの東洋医学で主に使われている言葉だそうです。新しい日本語訳の聖書『聖書協会共同訳』では、この箇所は「体の麻痺した人」という訳語になっています。中風という日本語自体が、現代においてあまり馴染みのない言葉になってきたので、より分かりやすい言葉に変えられたのでしょうか。イエス様の時代においてこの言葉で表される症状が、現代で言うどの病気にあたるのか、正確なところは分かりません。しかし、いずれにせよこの人物が歩けない状態であったことは、間違いないようです。この人の癒しを巡って、イエス様がどのように人々と関わられたのか、そして、それに対して当時のユダヤ教の指導者たちはどのような反応を示したのか。共に御言葉を見ていきたいと思えます。

癒しの奇跡の出来事は、ガリラヤ湖畔のカファルナウムの町で起こります。この町は、イエス様の弟子のペトロとアンデレの故郷です。二人が漁師であったことから分かりますが、この町は、漁業が盛んであったガリラヤ湖で漁をする漁師たちの漁師町でした。そして、イエス様のガリラヤ地方における活動の拠点ともなっていた町だったのです。

この町のある家におられたイエス様のもとに大勢の人々が集まってきました。イエス様が奇跡の力をお持ちだという評判は、ガリラヤ地方の方々に広がっていたのです。人々はその奇跡にあずかり、お話を聴きたいと集まっていたのでした。「戸口の辺りまですきまもないほど」と福音書はその光景を生き生きと伝えています。たくさんの人々でごった返す様子が目に浮かぶようです。その人々の中心で、イエス様は御言葉を語っておられました。

そこへ他の人たちとはちょっと違った様子の人たちがやってきます。中風の人と、彼を担いできた4人の友人たちです。寝たきり状態の中風の人を、イエス様に癒してもらおうと、友人たちはその寝ていた床ごと担いできたのです。この「床」は、今の時代の担架のようなものだと思います。この中風の方は、周りの人に介助してもらわなければ生きることが出来ない状態だったのでしょうか。その人のことを思い、友人たちがイエス様のところへ中風の人を運んで来たのです。しかし、既にイエス様の周りには沢山の人が取り囲んでいたため、近づくことが出来ません。しかし、なんとかして中風の人を癒してもらいたいと4人は必死です。当時のパレスチナの家は、その壁も屋根も粘土で固められた箱のような形をしており、その屋根には、外側から階段で上ることが出来るようになっていました。4人はその屋根の上に上り、床に寝ているままの中風の方も吊り上げます。そしてなんと、その屋根の粘土を掘り抜いて穴をあけ、ちょうどイエス様のおられる辺りにこの人を吊り降ろしたのでした。いくら大切な友人の病を癒してもらおうためとは言え、人様の家の屋根に穴をあけてしまうのです。並大抵の思いではありません。それほど必死に、この機会に賭けたのです。そして、それほどまでに、「イエス様であれば、この症状を必ず癒してくださる」と信じていたのでした。

イエス様は、その人たちの必死な思いに「信仰を見て」、中風の人に「子よ、あなたの罪は赦される」と告げられます。どうして、すぐに病を癒されるのではなく、罪の赦しを宣言されたのでしょうか。それは、当時のユダヤ人社会においては、病気はその人自身か家族が罪を犯した結果としてもたらされると考えられていたからです。つまり、この中風の方は、病気の症状に苦しんでいただけでなく、「あいつは罪を犯した者だ」という世間からの目線やレッテルにも苦しめられていたのです。その人に対し、イエス様は「子よ」と親しく呼びかけられ、彼を苦しめていた罪からの解放を告げるのです。

しかし、事態はそれでめでたしめでたしというわけにはいきませんでした。そこに集まっていた人々の中には、律法学者もいたのです。彼らはユダヤ教の中心である律法を研究し、その解釈を人々に教える役割を担っていました。当時のユダヤ社会の指導者たちです。

彼らの律法解釈では、人間の罪を赦すことが出来るのは唯一の神様以外にはあり得ません。イエス様の「あなたの罪は赦される」という宣言は、彼らにとっては「人間の身でありながらなんと大それたことを言うのだ、神様への冒瀆だ」

ということになってしまったのです。そして神様への冒瀆は、彼らが研究している律法に照らしてみれば、石打ちの死刑に値する罪なのです。

律法学者たちは、ここではそのことを口に出してイエス様を批判したわけではありません。「心の中で」考えていただけです。しかしイエス様はそんな彼らの心の中を見抜いて問いかけます。「罪の赦し」と「病の癒し」とどちらがより易しいか、と。

そのように問いかけられた上で、中風の人に言葉をかけることで病気の癒しを実現します。単に「罪が赦される」というだけなら、誰でも出来る簡単なことです。しかし、イエス様の言葉には、神様以外誰も出来ないはずの、罪を赦す権威が確かにあるのです。イエス様は、人となって地上に来られた神様ご自身だからです。そのことを、ここに集まった多くの人々の前で知らしめるために、イエス様は先の問いかけをした上で、病気を癒されました。病気が癒されたということは、当時のユダヤの常識に従えば、その背後にある罪も赦されたことの証明になります。

しかし、律法学者たちにはそのことは理解できませんでした。彼らはイエス様への敵対心を深めていき、この後の3章6節で、ついにイエス様を殺そうとする計画まで相談するようになっていってしまいます。

他方、そこに集まっていた人々は「皆驚き」「神を賛美し」ました。「今まで見たことがない」神様の権威を感じさせる出来事に、イエス様が神様ご自身であることを、論理ではなく直感的に察し、賛美せざるをえなかったのでしょうか。実は、マルコによる福音書において、イエス様の癒しの奇跡に対して人々が「神を賛美した」のはこの箇所のみです。

ここでイエス様が赦された「罪」とは、何なのでしょう。それは、病人であろうと、律法学者であろうと、誰もが心の中に持っているものです。神様を神様としない心です。神様の御心よりも、自分の思いを優先させることです。律法学者の罪は、目の前におられる神様ご自身であるイエス様を、神様だと認められず、それまでと同じ自分の常識において判断したことです。

イエス様は中風の人を癒す声かけの中で、「床を担いで家に帰りなさい」と告げます。来たときには、そこに寝かされて人に担いできてもらった床を、今度は自分で担いで家に帰るのです。これは罪も病も癒され、その人の本来の居場所に立ち返ることを示しています。イエス様は、その人が最もその人らしくある姿、最もその人らしくあれる状況へと導いてくださるのです。

ところで、中風の人はこの物語の中で、一切自分自身の言葉を発していません。これは、自分自身の思いで生きるのではなく、神様の導かれるままに歩みなさいという信仰者のあるべき姿を示していると感じられます。今こうして教会に集っているわたしたち一人ひとりも自分の意志でここに来ていると思っているかも知れませんが、神様のお導きによってここに呼び集められているのです。神様の導きだけではありません。そもそも、この癒された人は、どのようにイエス様の前にやって来たのでしょうか。床を担いで連れてきてくれた友人たちがいたから、癒していただくことが出来たのです。本人の信仰ではなく、周りにいる人々の信仰によって、罪が赦され、癒されたのです。本当の神様を、自分の神様とすることが出来たのです。

わたしたちも、自分の信仰生活を振り返ってみれば、自分だけでは信仰を告白し、洗礼を受けるに至らなかったと思わされるのではないのでしょうか。信仰の先輩たちの祈りに導かれて、疑い深かった自分が、神様を信じる者へと変えられていったという経験を誰しも持っているのではないのでしょうか。そのような周りの人々の祈りを通してわたしたちは、罪の赦しへと、神様とのあるべき関係の回復へと導かれていくのです。今日のみ言葉の中で、中風の人が、床を担いで来てくれた友人たちの「信仰」によって救われたように。

わたし自身も振り返ってみれば、教会の交わりの中で、沢山の信仰の先輩たちの祈りによって支えられ信仰を育んでくることが出来ました。いつでも、教会の中でつながりのある方々が私のことを覚えて祈ってくださっていることを感じられ、心強く思えます。そして、わたしたち一人ひとりが罪から救われるのを、立ち返って来るのを、誰よりも望んでおられるのは、他ならぬ神様ご自身なのです。

中風の方は、イエス様によって癒され、イエス様の言葉どおりに起き上がって歩き出しました。イエス様ご自身は、今日の物語に登場した律法学者たちをはじめとする反対者たちの敵意によって、十字架の苦難への道を歩いて行かれます。しかし、その十字架の死から、復活して「起き上が」らせられるのです。そのことによって、わたしたちすべての罪、神様から背く心を打ち砕き、神様が天地創造の際に、「極めて良かった」と言われたあるべき状態へと回復させてくださるのです。神様が関係回復の癒しへと招いてくださっている、その御声に喜んで応え、起き上がって歩み出しましょう。

(牧師 三浦 啓)